

## 子どもの活動と保育空間（その二）

堀井仁子

### スペース保育継続期から定着期へ

赤塚保育園の保母は、保育経験十五年以上の平沢主任をはじめ、五～八年の経験を持つ四人の保母、それに、昭和三十年生れの若い三人の保母たち。保母のチーム・ワークも保育園が平家の小規模な方であるため、すこぶる良い。

若い三人の保母が、赤塚へ配属された時には、すでにスペース保育が始まっており、この二年間で何らかのものを先輩保母から学び、見様見真似で保育を進めている。

実質的に、保育の軸になっている四人の保母もいろいろな経験を持っており、保育を行なう姿勢は同じなのだが、方法が違う。

仲間同志の「和」を強調し、一斉保育を中心に保育を進めたい保

母、自由あそびを中心に、子どもの個性をより尊重したいとする保母、いろいろである。共通して、家庭を持っているため、残念ながら、私の望む程には、積極的に動けない。

しかし、主任の平沢保母は、三年間の実践で、子どもの生活に、どのような影響を与えるか？「空間も考えた保育」をどのように生かせば良いか？をもっともまじめに考えてきた。担当してきたクラスの状況を通して次のように話してくれた。

「五十一年度（継続期）はたんぼほ組（三歳児）の担任と決まっています。まず考えたことは、保育室をどのようにスペース割りしたら、子どもの生活がより良く、保母もより良い保育が進められるかということでした。この一年間のスペース保育（試行期）がこういうことを、考えさせるものになっていたのでしょうか。

1 クラスの半分の子どもが、新入園児であるため、安定した状



そんな風に考え、坂本さんに相談して、活動を動的なもの、静的なものに分け、それぞれに対応した活動空間を設けました。

変更後(図11)の実践を通して、次のような長所と短所が出てきました。まず長所は、

- ① 活動の内容によって、活動空間を分けたので、子ども達の活動が各々十分にできる。
  - ② 子ども達の流れがスムーズになり、食事を終えた子どもが、ごっこあそびのスペースであそぶため、食事を続けている子どもものじゃまをすることがなくなった。
  - ③ 机を重ねたり、降したという必要以上の労働が省かれ、それを他の仕事に向けられる。
  - ④ 広い遊戯のスペースに、カーベットを一枚敷いただけで、一角がごっこあそびのスペースとなり、あそびを安定させる。一方、短所は、
  - ⑤ 本箱は、高さは良いが、背暗がりとなり、興味がうすれる。
  - ⑥ 机の下においていた箱積木は、ごっこあそびのスペースと離れていて、出し入れに保母がいないと無理で、自発的活動は少ない。
  - ⑦ ストープ、オルガンの置場所がない。
- 保育室の絶対面積が、限られているため、ストープを出した時

期は、オルガンを南面窓下の机の横に置いて、この年度は、これ以上大きな変化はなく、実践してゆきました。

五十二年(定着期)になって、再度、三歳児の担当(森田保母と複数担任)となり、前年度の短所を何とかしたいものと、考えなおしてみました。

図11のように、(a)に対しては、本箱の台にしている遊具棚の使い方・向きを変えることで、解決することができ、同時に、(b)についても、前横が広く空いたことで、子どもでも出し入れが可能となり、多くあそぶようになりました。

けれども、まだストープの位置の問題、そして、オルガンも、

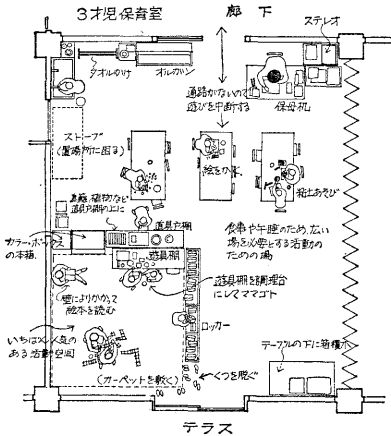


図11 定着期のスペース保育

活動空間内に置けば、狭くなるという問題が残りました。

『限られた広さの中で、どうやったらいいかしら?』オルガンやロッカーをあちこち動かし、歩いたり、座ったり、ふとんやゴザの寸法を測ったりして、やっと落ちついたのが、現在の形です。

スペース保育を始めた時、正直言って、面倒くさいという気持ちでした。でも、進めて行くうちに、子ども達の生活が違ってきただけが、はつきりとわかってきました。そして、保母も今まで以上に真剣にとり組み観察をする態度が育ってきたのです……」

### コーナーとスペースの違いについて

四年間、私は、赤塚保育園で子ども達と生活を共にし、たまたま、坂本さんに出逢い、スペース保育を経験してきました。当初、坂本さんより提示された子ども達の流れ図(図-2、前々号)によって、私達が、いかに何気なく保育室を考えているか、またただ家具の位置を変えるだけで、子ども達の流れがスムーズになることを思い知らされました。そして、この時、「コーナーとスペースの違い」について、説明を聞いたが、さっぱり理解できず、はじめ、これらを混同していました。けれど、やがて子ども達の活動の中から、その違いに気づき、次のように整理してみました

た。

コーナーとは、

図-12(A)のように

に、二方が壁、ま

たは家具で、子ど

も達は、その中で

活動を展開する。

外部からの刺激を

受けやすく、静的

な活動には不向き

で、あそびを中断

させる要素が多

く、あそびは、ど

うしても長続きし

ない。

スペースとは、

図-12(B)のよう

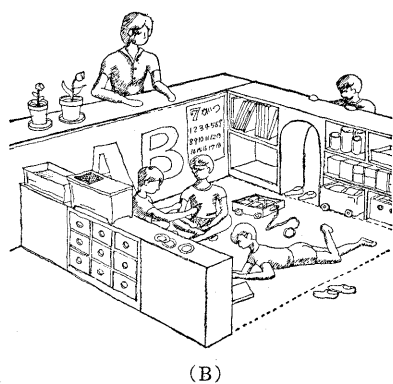
に、三方を区切っ

たものや、二方を

区切り、そこにカ



(A)



(B)

図-12 コーナーとスペースの違い

1ベットやゴザを敷いて、活動空間をはっきりさせたもの。その中で活動は、コーナーとは、あそびの継続時間の長さを取り上げて大分違う。特に、絵本を読む場所などは、スペースの方が、子ども達にとって、他からの干渉も少なく、また、「秘密の場所」という意識ができ、落ちついた活動を助長させる。

家具で子どもの視線は、さえぎられているが、保母は、子ども達の活動を十分に見守れる。それは、家具の高さが、九〇センチぐらいの場合、子どもと保母の目の高さが違うため、子どもからは活動空間の外は見上げる状態となり、保母は普通の視線方向となる。また、三〇センチぐらいの家具やカーペットを敷くだけの場合でも、子ども達は、場所・範囲を意識し、そして無意識のうちに、不透明なカーテンを作ってしまったように観察された。そして、活動の内容によって、オープンな活動空間、まったく個室的なイメージを与える活動空間など、それぞれ変化のある方が多い。それは、その目の状態に合わせて、あそびや活動空間を選べ、集団の中でも、子ども達の個性を尊重できることなど、子ども達の活動から教えられました。

このように、私達は、従来のような無性格なコーナーより、性格付けのされたスペースへと、今では、はっきりした目標をもって、子ども達の活動の場を設けて行くようになってきました。

### 子ども達は今……

保母以上に、早く違いをとらえたのは、やはり、子ども達で、生活も、はっきりと変わってきました。

前々号で、一部述べましたが、自由あそびの時に、ペランダや廊下づたいに、保育室をぐるぐるとかけ廻る追いかけて、多く見られました。静かに活動している他の子ども達のことなどおこまいなく、時には、そのあそびまで、破壊してしまう始末。今では、あそびの発展した場合、特定の子どものみを除き、ほとんど見られません。

特定の子どものとは、四歳児のみの君、公一君らで、比較的コソコソとあそぶことが多く、仲間と一緒にあそんでいても、突然、無意味ないたずらをして、仲間と嫌がられ、村八分にされてしまうのです。あそびの持続時間も短かく、すぐ飽きてしまう。落ちついて物事を考えることのない家庭環境で育っていると言ってしまうとそれまでで、結局、あそび方・あそびを知らず、仲間と共に活動するルールを知らないと言える。

保母としては、もっとダイナミックなあそびができるよう、空間を活用してあそび・あそび方を知るよう、そして、落ちついて物

事を考えることを指導している。今では、こういった子どもも、かなり減っている。

また、子ども達自身が、心理的に場を認識してきたことは、私達としては、驚きです。

積木やブロック等、手近な所にある玩具等も、カーペットを敷くことにより、大きく発展したあそびとなってくる。カーペットは、掃除の都合で、朝子どもが登園する直前に敷くことが多いが、うっかり保育が敷き忘れたりしていると、(オープンな活動空間と重複して利用している場合など)そこは、レスリングや怪獣ごっこなど動的なあそびの場となる。しかし、ひとたび、カーペットが敷かれると、その上は、自然に、ブロックやママゴト等、静的なあそびに移ってゆく。

また、保育の指導がゆき届いているクラスや年上のクラスでは、自分達でカーペットを敷いてあそぶ。

これらは、スペース保育三年間の成果であり、保育による保育の重要性と共に、活動空間を設けることが必要なことが顕著に現われたとみて良いのではないだろうか。

## 今後の課題と問題点

しかしながら、すべてにおいて、スペース保育が従来の保育を改良した、新しい保育方法の一つとは、言い切れません。

根本的な問題としては、絶対面積の不足は改良されていません。そして、園舎の計画・設計段階で区の管轄等設計者に対して、現場の意見が、十分反映されるような建設システムなどは、働きかけていますが、改良されていません。

従来のワン・ルーム形式での保育、およびその空間の多くの問題点は解決されましたが、ある方から、「(いつも同じような活動の場を設けていては)あそびが固定化しないか?」との疑問を投げかけられました。

私達は、バタバタと落ちつきのない子ども達に対して、あそびの深まりや持続性にとらわれ、指摘された点を見落としていたことに気づかされました。

ともあれ、最初の目的であった子ども達の思考の深まりや、集中してあそぶことについては、ある程度、達成したかと思っ  
ているが、今、「空間を活用したあそびそのものの指導・誘導」をもう一度考えなおさねばなりません。

二丁

共同 板橋区立赤塚保育園 平沢公代・高橋雪子他  
神谷・荘司計画設計事務所 坂本啓治

(板橋区立弥生保育園)